小学生の要約課題・小６・物語文①

月　日	名前	点

油染みの浮いたコンクリートの床の端には、なにか工作機械の梱包(こんぽう)にでもつかわれていたような薄手の発泡スチロールが、ひざほどの高さに重ねられていた。去年はマット代わりに床に敷きつめて寝転がりながら、華火(はなび)を見たのだ。

そのマットに白いガウンを羽織(はお)ったやせた男の人が横になっていた。大儀(たいぎ)そうに首だけ起こして、こちらを見ている。目があった瞬間に、あのポスターの人だとわかった。病院から逃げ出した末期の患者だ。その人は頭を落とすと、ほっとしたようにいった。

「いたずら小僧か・・・私はここでちょっと休んでいるんだ。むこうにいって、静かにしておいてくれないか」

一番したの階段から、ナオトがいった。

「あのアカサカさんですよね。家族の人が心配して、町中の電信柱にポスターが貼(は)ってあります。病院から抜けだしちゃったんでしょう」

サンダル履(ば)きのやせたくるぶしが震えて、アカサカさんが上半身を起こした。プールあがりに目薬をさしたような涙目が、驚きに見開かれている。

「みんな知ってるのか」

先頭のぼくが代表してうなずいた。

「余計なお世話かもしれませんが、病院に帰ったほうがいいんじゃありませんか」

アカサカさんはしばらく黙って、ぼくたちをじっと見つめていた。それは不思議な目だった。ぼくたちをとおり越して、夏の夕暮れの空や東京湾の鈍い海面を見ているようでもあり、ぐるりと反転して自分自身の頭のなかをのぞいているようでもあった。ぼくは急に自分が電線やコンクリートの階段やコンビニの袋にでもなった気がした。人間ではなく、その場を構成するただの物体になったような気分だ。

アカサカさんはガウンの胸ポケットに手をいれた。

「わたしの先は見えている。医者の治療は気休めにふるう暴力と変わらないし、息子たちは廊下で声を殺してののしりあっている。あそこはわたしが帰る家ではない」

つらそうでもない声で、淡々とそういった。それから、アカサカさんはかすかに笑う。

「どうだ、わたしと取り引きしないか」

ポケットからエンジ色の革の財布を抜いた。

「金なら最後だと思ってたっぷりとおろしてきた」

アカサカさんの枯れた指先が開いた財布を探っていた。ゆっくりと数えて抜きだすと、四枚の一万円札を目のまえにかかげて見せる。

「きみたちがわたしのことを誰にもいわずにいてくれたら、これをやろう・・・そうだな、必要なものを買いにいってくれるなら、また別にこづかいをやってもいい。どうだ、どうせわたしは長いことないんだ。病人の最後の望みをかなえるアルバイトでもしないか」

ぼくはうしろを振りむいた。四人のあいだで不安な視線がいきすぎる。ジュンが声を張った。

「ちょっと待ってください。したで話しあってきます」

ぼくたちは一階分ほどおりて、ばらばらに階段の途中に座った。ナオトがちいさな声でいった。

「死にそうな病人を見殺しにするバイトなんて、やばすぎるよ」

ダイが誰の顔も見ずに、ぼそりといった。

「だけど、一万円だぜ。がんばって働くんじゃなくて、黙ってるだけでもらえる。こいつはでかいぜ。それに、あのオッサンの望みもかなうしな」

確かにアルバイトのできない中学生に一万円は大金だった。ぼくのこづかいの二ヶ月分だ。ジュンがい

った。
「金のことは、たぶんどっちに転んでも問題はないと思う」
僕はいった。
「どういう意味」
「あれだけ町中にポスターを貼るくらいなんだから、もしぼくたちがあの番号に電話して病人を見つけたといえば、謝礼くらいもらえるさ。もしかするとさっきよりもでかいかもな」
ダイが感心したようにいった。
「さすがにジュンだな。じゃあ、誰が電話する？」
そういうとストラップを二十個くらいつけた携帯電話をジーンズのポケットからジャラジャラと抜いた。ジュンがダイをとめた。
「そこからが問題になるんだ。どっちにしても金になるなら、それ以外の条件を考えなくちゃいけないだろ。ぼくは病院からパジャマで逃げるくらいだから、あの人にはよほどのことがあったと思う」
ぼくは黙りこんでいるナオトにきいてみた。
「ナオトはしょっちゅうひっくり返って入院してるから、病院のことはよくわかるだろう。あのなかで暮らすのってどんな感じなんだ」
つば広帽のしたで眉が険しくなった。
「みんなにはすすめないよ。あの人の気もちはよくわかる。それにぼくと違って、もう治る見こみもないみたいだし。要するに、ぼくたちが通報すれば家族の心配がなくなり、病院側も満足する。でも、あの人は残りすくない自由とひとりですごす時間を失う・・・ぼくには、どうすればいいかわからない」
狭い水路をはさんで東芝ビルがまぶしくそびえていた。ゆりかもめと首都高羽田線の高架(こうか)が贅沢(ぜいたく)なおもちゃのようにどこまでも伸びている。海のむこうに広がる街は、なんのトラブルもない蜃気楼(しんきろう)のように美しい街に見えた。それともあそこにもアカサカさんのような人がいるのだろうか。死ぬまでひとりのほうがまだましだと決心するような人だ。ジュンが口を開いた。
「結局、人生ってのは大人のいうとおり、妥協(だきょう)の連続なんだろ。どっちのサイドもすこしずつ満足するようにしてやろう」
ぼくは笑っていないジュンの目をとらえていった。
「どうするんだ」
「大華火の夜まで、あの人は自由だ。だけど、死ぬまで放っておくわけにはいかない。祭りが終わったら、家族に連絡をいれよう。それで、どう？うまくすれば謝礼の二重取りだってできるかもしれない。文句ないだろ、ダイ」
さすがだった。ぼくはすっかりジュンを見直した。面倒なトラブルにさっと線を引き、利害を調整して、あっさりとこたえをだす。ともかく頭がいいんだ。その割りには当人がいつも淋しい感じなのが気になるけれど。ナオトとダイが声をそろえた。
「ガッチャ」
それでぼくたちは、ゆっくりと雇い主が待っている踊り場に戻(もど)った。
「明後日にその・・・東京湾大華火祭があるのか」
アカサカさんは横になったままそういった。なにか話してくれというわれて、ぼくたちはこの秘密の踊り場を見つけたときの事情と大華火の夜の混雑を話した。ナオトとぼくは、発砲スチロールのマットの近くに座り、ジュンとダイは離れた手すりの壁に背をもたせかけていた。アカサカさんはときどき眠っているように見えたが、話の要所では目を開いて適当なあいづちを打った。ま新しい一万円札は、すでにぼく

たち四人のポケットのなかに移動している。
　対岸のビル群の上はまだ明るく夕暮れの光を残しているのに、空は海上のほうから夜の色に変わっていた。ぼくたちと話をして、アカサカさんはすこし疲れたようだった。ナオトが心配そうにいった。
　「明日の午後にまた顔をだしますけど、なにか必要なものはありませんか。今、すぐに買いにいきますけど」
　ペットボトルがのぞくコンビニの袋に目をやってアカサカさんはいった。
　「いや。食欲はないし、飲料水は足りている。もうタバコも酒もほしいとは思わなくなった」
　ジュンが恐るおそるきいた。
　「あの・・・あの病気はひどく痛いってきいたことがあるんですけど、だいじょうぶなんですか」
　病名はいわなかった。それはぼくも不思議に思っていたことだ。アカサカさんはひどくやせているけれど、痛みを我慢している感じではなかった。逆に表情にはぼんやりとだが、幸せそうな明るさがある。

　（中略）

　ぼくたちは途中で寄り道をした。みんなアカサカさんにもらった金をつかい果たしてしまいたい気もちがどこかにあるようだった。早くも営業を始めた清澄(きよすみ)通り沿いの露店で、もちきれないほどのものを買う。焼きそば、じゃがバタ、イカ焼き、お好み焼き、カルメ焼き、りんご飴(あめ)、綿飴、かき氷、ラムネにガラナジュース。なかには中古テレビゲームの露店もあった。ジュンは段ボール箱の横にしゃがみこむと、初代セガ・サターン用のクソゲームを一本三百円で山のように買いこんでいた。
　前日よりもたくさんの手みやげをもって踊り場についたとき、すでに時刻は七時ちょっとまえになっていた。踊り場から見る空は暗く、晴海埠頭(はるみふとう)公園は突堤(とってい)から見物客が海にこぼれそうになっている。先頭のダイが声を張った。
　「こんばんは。いよいよ待ちに待った東京湾大華火祭が始まるよ。アカサカさん、なにかくいたいものない？」
　ダイはマットの手まえにたくさんの駄菓子(だがし)を並べた。アカサカさんはうれしげな表情だったが、はっきりとした笑顔をつくるのはつらいようだ。ナオトが心配そうにいった。
　「だいじょうぶですか」
　アカサカさんは踊り場のコンクリートの天井を見たまま、ぽつりといった。
　「いよいよだな。あと数日という気がする」
　首を横に振り、夏祭りの菓子を見た。
　「ほう、懐かしいな。そのカルメ焼きをくれないか。細かく割って」
　ナオトはカルメ焼きに飛びつくと、端を砕(くだ)いてアカサカさんの口に運んだ。アカサカさんは目を閉じて、口のなかで焦げた砂糖のかけらを転がしている。
　「甘いものだなあ。こんなに甘いとは、子供のころは気づかなかった。きみはよく入院するというから知っているだろうが・・・」
　そういってアカサカさんは震えながら、上半身を起こした。全身の力を振り絞っているようだった。すぐにナオトが背中を支える。
　「最後にひとつ話しておきたい。よくドラマなんかで、最後のときを迎えてじたばたと見苦しいことをするが、あれは間違いだ。わたしはたくさんの病人を見てきたから、よく知っている」
　ジュンがアカサカさんをジッと見つめていった。

小学生の要約課題・小６・物語文①

「もしかして医者だったんですか」
アカサカさんは、今度ははっきりと笑った。
「そうだ。医者の不養生というやつだな。わたしがみとった患者の多くは、自分の死期を悟り、家族友人に感謝の気もちと別れを告げて、立派に旅立っていった。ほとんどは有名でも金もちでもない普通の人だった。わたしは自分にそんなことができるか、よく不安に思ったものだ。それがこんな形で自分の番がまわってきてしまった」
夜空に大輪の花が咲いて、あとから腹に響く音がくる。踊り場の隅まで一瞬明るく浮きあがり、暗やみが戻ると地鳴りのような歓声が続いた。ぼくは華火に背をむけて、アカサカさんを見ていた。つぎつぎとあがる尺玉で、やせ細った顔が色とりどりに照らしだされる。
「きみたちに強がりをいってもしかたないが、わたしもなんとかみんなに続けそうだ。なるべく迷惑をかけずに、静かにひとりで終わりにしたい。最後にきみたちに会えて、こんな豪勢（ごうせい）な華火も見物できた。感謝している。どうもありがとう」
お礼をいわれることなど、ぼくたちはなにもしていなかった。誰かにありがとうといわれて泣いたのは、ぼくは初めてだった。きっとジュンやダイやナオトも初めてだったに違いない。ぼくたちが涙をぬぐうあいだにも、夜空には光りの華が開いていた。パッと咲いたはなびらが、海風に流され淡い煙になって消えるとき、鮮やかな残像を残していく。その光りが目の裏に咲いているうちに、また新しい華火があがる。東京湾の夜空は、ずっと昼間のような明るさだった。
きっとこの世界も同じことなのだろう。どこかで誰かが消えて、その名残が響いているうちに、新しい人が生まれる。それでにぎやかで、ちょっとばかばかしいこの世界が続いていくのだ。ぼくたち五人は、それから黙って華火を見あげていた。普段はおしゃべりなぼくたちを黙らせる力が、一瞬咲いて消えるものにはあるようだった。

（石田衣良『４TEEN 大華火の夜に』より）

あなたがこの文を読んで感じたことを、『華火（花火）』『人生』『アカサカさん』という言葉を必ず使って、自由に書きなさい。